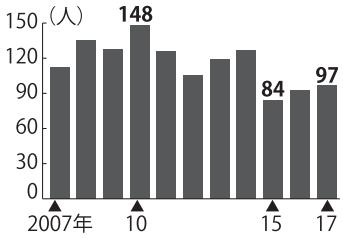
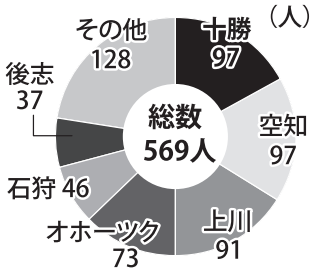
農業ガイド1174号　2018年9月22日
新規就農97人　2年連続道内最多　17年管内

道農政部は2017年の新規就農者実態調査をまとめ、十勝管内は97人と2年連続で道内最多となった。農家出身でない新規参入者は少ない半面、17年は90人の後継者が新たに就農。新規就農者全体に占める比率は93％と全道平均（78％）を大きく上回るのが特徴だ。管内農業は畑作や畜産が中心で大規模化が進んでおり、新規参入の余地が小さいことが背景にある。

❖十勝管内の新規就農者数



❖振興局別の17年の新規就農者数



この調査は、振興局ごとに市町村や農業委員会の協力を得ながら毎年実施し、道農政部が集計する。

管内の新規就農者は100～150人の範囲で推移していたが、15年からは3年連続で100人を割り込んでいる。全道でも同様の傾向で、17年は直近のピークだった700人（10年）に比べて131人少ない569人にとどまった。

振興局別では管内と空知が97人で最多。以下、上川が91人、オホーツクが73人となった。16年は十勝が93人で単独首位だった。

また調査では、就農者を農家出身で学校卒業後に就農した「新規学卒」、農家出身で会社勤めなどを経て就農した「Uターン」、自ら農地を取得するなどした「新規参入」に3分類し、人数を公表している。それによると、管内は農家出身の新規学卒、Uターンが合計90人。Uターン組も、20～30代と比較的若い年齢で戻ってくることが多いようだ。後継者が多いことは農業基盤の維持につながり、明るい材料となる。

その一方、管内の新規参入はわずか7人。他の振興局と比べても見劣りする。

新規参入者は初期投資が少なくて済む野菜に集中しており、それが地域間格差につながっているようだ。管内で盛んな畜産（酪農を含む）は多額の設備投資が必要。畑作も離農が少ないためまとまった農地を取得しにくい事情がある。

農業ガイド1175号　2018年9月29日
生育遅速　収量に影響　十勝振興局11～18年作況分析
豆類では挽回も

十勝総合振興局が公表した2011～18年の作況データによると、作物の生育の遅速はおおむね収量に比例している。今年は生育の遅れが目立つ豆類に関しては、過去の例を見ると必ずしも収量に結び付いていない年も見られる。

15日現在の畑作物の生育遅速は、遅れているのもので、ジャガイモが1日、大豆が3日、小豆が6日、金時が6日、手亡が4日。一方、ビートは2日早く育っている。

過去のデータではジャガイモやビート、大豆は生育が早いと最終的な収量が増え、遅れると収量が落ち込む傾向が見受けられる。小豆や金時、手亡も全般的には同じ傾向だが、年によっては状況が異なる場合もある。小豆と手亡は15年、それぞれ2日、1日遅れだったが、収量が良かった。

金時は15年、16年が共に3日遅れだったが、収量は15年が過去7年で最高、16年が最低となっている。

❖年ごとの生育遅速(日)と収量(キロ)　9月15日現在

年	ジャガイモ		ビート		大豆		小豆		金時		手亡	
	遅速	収量	遅速	収量	遅速	収量	遅速	収量	遅速	収量	遅速	収量
2018	遅1	—	早2	—	遅3	—	遅6	—	遅6	—	遅4	—
2017	早1	3670	早4	7100	遅1	262	遅4	—	遅7	—	遅6	—
2016	遅1	3170	±0	4980	遅4	212	遅3	162	遅3	63	遅2	179
2015	早6	3700	早6	6660	早1	271	遅2	297	遅3	271	遅1	305
2014	早5	3620	早6	6280	早4	288	早3	301	早2	236	早2	282
2013	—	3580	早5	6420	早4	249	早4	263	早2	169	早3	268
2012	—	3540	早2	6590	早2	277	早2	289	早1	192	早2	250
2011	—	3540	早2	6340	早5	255	早6	251	早3	78	早4	—

※平年に対しての遅速。収量は10㌃当たり。
※■は最も収量が高かった年、■は低かった年。— はデータなし。